

教育改革を行う理由を改めて考える



飯田 嘉宏

(国立大学法人横浜国立大学長)

他大学と同様に本学も多面にわたって改革・改善を心がけ、その理由や方向性を検討して具体化を進めている。しかし、緊急に重要なことは教育についてであると考え、特に教育改革・改善を行うべき理由について、学内で繰り返し説く努力をしている。というのも、現場を直接担う教員一人ひとりがその基本的な理由ないし必然性をよく理解さえしていれば、多様なケースごとに自ら考えて新たな実践を行うことができるからである。この課題については既にいろいろな議論があるが、本稿では新しい視点も加えて改めて整理してみた。

一 大学改革と教育の改革

大学の改革が叫ばれ、少子化や高等教育の大衆化と国際的流動化、競争的環境等の到来、法人化の制度変更等があつて、現在は各大学ともそれらの対応に追われている。しかし、特に教育については改革の理由または必然性がだいぶ前から存在したと考えている。それは大別して以下の三つであろう。

第一は、我が国をはじめ世界中の社会の在り方や価値観が大きく変わりつつあることに大学教育が対応するた必要があるだろう。

第二は、我が国の大学の在り方が、基本的には明治以来あまり変化していなかったことへの対応である。明治以来の大学、特に国立大学の使命は欧米の知識を我が国に導入し、有為の人材を育成することであつたと言える。したがって当初は、「備外国人教師」や優れた日本人教師が、学生に壇上から欧米知識を「教え授ける(教授)」のが教育であつた。初等・中等教育でもほぼ同様であり、現在も尾を引いている。また研究面でも、欧米知識や技術を紹介することが研究と理解された程であり、今でも人文・社会科学方面ではこの傾向が残っているかと思われる。そしてこのことが、現在の我が国混迷の一原因であり、また大学への批判と同時に期待の一因でもある。以上の教育により急速に欧米に追いついたことは高く評価できるとしても、今後は新しい目標や考え方、技術等を自ら考えて生み出す創造性を育む教育を行うしかない。

第三は、本節の最初に記したような、各大学を取り巻く境界条件が最近大きく変わったことに直接対応することである。そしてこの境界条件の変化は、第一と第二の問題に多く起因していることを認識しておく必要がある。

二 教育の理念と目標について

広辞苑によれば、「教育」とは「人間に意図を持って働きかけ、望ましい姿に変化させ価値を実現する活動」と定義されている。ここで、「意図」が教育理念であり、「望ましい姿」が教育目標と考えられ、教育やその組織には理念と目標が不可欠なことを示している。しかし従来の我が国には、建前を神棚に上げる風潮もあつてか、この議論は十分であつたとは思えない。特に国立大学や公立学校では、教育目標は「国に有為な人材」のような漠

然かつ共通的なものであった。これは教育の機会均等確保の原則と普遍的な教育が指向されたことが理由と思われる。

しかし教育の定義はもとより、自主・自律の下での大学の個性化が叫ばれている現在、各大学の理念・目標と共に学内の各教育単位についても理念と目標、中でも特に教育目標を明確にし、同時にそのための教育プログラムを建前や作文でなく、学生の育成中心で説明責任を果たせる実質的なものにするのが、今必要なことであろう。

ここで教育目標と教育改革の関係について判りやすい例を挙げよう。教育目標つまり育成すべき人間像は、その社会的機能面については「人材」と言われる。そして人材には、①目標設定型、②目標達成型、③過程実現型の三種類があるとの考え方があられる。ここでの目標とは、その人や組織を囲む環境下で自ら持つべき目標のことであるが、①は目標を自分で考えて設定し達成できる人材、②は目標が与えられれば過程を見出し達成できる実務型人材、③は目標と過程の指示があつて初めて動ける人材と言えらる。

ここで先述した明治以来の教育の話に再度戻すが、我が国は先の高度経済成長期までは言わば殖産興業と富国を目指し、先行する欧米の知識や技術を目標として進んできたと言える。つまり目標があつたわけだから、大学教育の主目的は、②と③の人材育成中心でもよかつたのである。勿論その中から優れた①型人材がある程度生まされたわけだが、高度成長期までは「真面目で素直」な学生が社会から求められていたことが示すように、②と③に甘んじていたように思う。今後は①を多く輩出する教育に意識的にギアチェンジしようとするのが、現在の教育改革であると言えるだろう。そして教育次第で、学生のランクをひとつ上げられることを理解しておこう。

育成人材像が変われば、教育の内容や方法も変える必要があるのは至極当然である。そして現在、我が国の再生は高等教育（初等・中等教育とも）のこうした質的転換ができるかどうかにかかると考えられている。まずは教育理念と目標を明確に自覚した高度教育の実践が俟たれる。

三 感性を重んじる教育を

以上の考察からも、教育改革の方向性や具体的な改革内容がいろいろ導き出せるが、それを論じるには紙数が

足りない。以下では別の視点から方向性を考えてみる。

大学は學術の中心として位置づけられている。しかし學術と教育との有機的関連を論じた例はあまり認められない。そこで、恩師である故棚沢泰先生のお考え（養賢堂、『工学と技術の本質』より）に筆者の考えを加えさせていただき図に示した。ここでは工学を例としているが、経済学や教育学等でも同じような考えで論じられると考えている。

内容を説明する紙数はないので要点のみ記せば、學術は「学」と「術」に分かれ、その融合したものが専門的教育分野（この場合は工学）であること、全分野が当該教育に有機的な関係を持つことなどである。そしてここで筆者が指摘したいのは、「学」は理性に「術」は感性に主に依拠すること、芸術分野を除いての従来の我が国の教育は前記のように欧米知識伝達の性格が影響して「学」を偏重してきたこと、そして理性は感性を圧迫しさえすることである。欧米の合理的理性は素晴らしいとしても、日本人は感性のほうが格段に優れているのではなからうか。

改革とは新しいこともさることながら、従来から持つているよいところを伸ばすことだと言われる。我が国の教育では、より感性を重んじて日本人にとって両者のバランスの取れた教育にするべきと考えている。創造性は理性より感性に依拠すると、筆者自身のつたない研究経験から感じているし、目標設定型になるような学生は、教育において感動や感銘を受け、それによって自ら考え学ぼうとする意欲が生まれ創造の素質が育まれるからである。

図 學術の分類と大学における教育分野の関係（工学を例として示す）

